絆新聞 ふくしま
創刊号
避難している人 みんなの情報紙
がんばろう福島！
“絆”づくり応援事業
福島県委託事業
＜絆新聞編集室＞
〒963-8835　福島県郡山市小原田2-19-19
TEL024(944)0083
メールアドレス　kizuna-fp@utsukushima-npo.jp
＜受託・発行＞
特定非営利活動法人 うつくしまNPOネットワーク
発行日：毎月1日

＝今月の紙面＝

2面　●子どもへの支援通じコミュニティー再生を
●福島版「仮設de仮設カフェ」各地で開催
3面　●復興願う「エイサー」響く
4面　●「絆メールマガジン」配信
●ひろの絆づくり支援センター発足

情報お寄せください

絆新聞編集室では、皆様からの情報をお待ちしています。避難生活であきらめていたことが実現した、仮設住宅の一人暮らしのお年寄りを定期的に訪問している、避難先や別の地域で家業を再スタートさせた人、イベント開催の予定、困りごとなど各種相談、どんな内容でも結構です。電話、郵便、メールでお寄せください。

本誌の配布場所募集

絆新聞編集室では、避難生活を送る方みなさんに本紙をお届けしたいと考えております。仮設住宅以外で生活されている方々の目につきやすい施設、企業、店舗等で本紙を置いていただける場所を募集しています。本紙は無料です。

避難所に咲いた愛 1000人祝福

▼多くの聴衆に祝福され挙式する猪狩さん夫妻

九月十六日(金)、避難生活の中から愛を育み、人生の大きな幸せをつかんだカップルが誕生した。しかも二人の式場は、美しい夕暮れの猪苗代湖志田浜、さまざまな著名アーチストと聴衆を合わせ千人を超える人々が集まった福島復興のロックイベント「ＬＩＶＥ福島　風とロックＳＵＰＥＲ野馬追」の会場だった。

復興ロックイベント

『LIVE 福島』で夢の結婚式

● 富岡の猪狩さん夫妻

今回挙式した二人は富岡町の猪狩恵大さん(28)、富美子さん(24)。町職員の二人は、震災後、町民の方々と郡山市のビッグパレットふくしまに避難してきた。

同じ職場で仲の良かった二人だが、町職員として住民の方々の支援に奔走するなか、不安や悩みを打ち明け支え合ううちに、お互いを特別な存在として意識するようになっていった。

けれども、いつまで続くかわからない避難生活、挙式などは考えられなかった。ビッグパレットふくしまの避難所の閉鎖が近づく八月のある日、富美子さんは偶然、震災のため挙式できずにいるカップルに結婚式を提供するイベントの案内を目にした。

企画したのは、テレビ番組がきっかけとなって郡山の若者たちを中心に結成された「福島リアル」。彼らは「今福島に住む自分たちで福島を元気にしよう」と活動をはじめ、最初に取り組んだのがこの結婚式のイベントだった。猪狩さん夫妻は募集に応募。「ＬＩＶＥ福島」の開催を呼びかけた郡山市出身のクリエイティブ・デイレクターで「Ｉ Ｌｏｖｅ ｙｏｕ ｂａｂｙふくしま…」でお馴染みの「猪苗代湖ズ」のメンバーでもある箭内道彦さんらの協力もあり、県内各地六日連続で行われた「ＬＩＶＥ福島」の三日目、猪苗代会場で実現の運びとなった。二人はイベントに先駆けて十三日に婚姻届を出した。

コンサートが始まって一時間が過ぎたころ、ステージは結婚式場へと模様替えをした。

父の猪狩富行さん(55)に手を引かれヴァージンロードを歩む富美子さんに無数のしゃぼん玉が舞った。新郎新婦に面識はないけれど「福島を元気にしたい」という共通の思いで「ＬＩＶＥ福島」に集った千人もの聴衆から二人に熱いエールが惜しみなく注がれた。

新郎の恵大さんは「このような盛大な会場での挙式なので、観客のみなさんに受け入れてもらえるか少し不安もありましたが、祝福していただいてたくさんのパワーをもらいました」。富美子さんは「震災で二人の仲がより深まりました。辛い時を支え合うなかで、お互いが本当に大切な存在だということがわかりました。福島で幸せになることができた私たちを見て、他のみなさんにも幸せになることができるんだと思ってもらえたら嬉しい」と語った。

式の司会をつとめた「福島リアル」代表の関根妙子さん(33)は「素敵なご夫婦で、この企画を実現できてよかった。これからも活動を続け、福島で生きていく希望を少しでも多くの人たちと一緒に見出していきたい」と話す。

避難生活の中でも幸せをつかむことができた新郎新婦。関係者への感謝と未来への思い、「福島リアル」メンバーの「できることをしたい」という熱い思いは、これからも福島に希望を紡いでいく。

末永くお幸せに…!!

『仕事に一層の責任』

挙式から一ヵ月「祝福してもらえたことに恥じない生活をしたい」と話す猪狩さん夫妻

猪苗代湖畔での挙式から一ヶ月、猪狩さん夫婦を職場のあるビッグパレットふくしまに訪ねた。

終業後、穏やかな表情の恵大さんに現在の心境を聞くと少し背筋を伸ばし「仕事により責任を感じるようになりました。祝福してもらえたことに恥じない生活をしていきたいです」。

取材の間、通りすがりの他の職員から〝冷やかし〟の声が飛ぶ。その声には温かみがあり、二人の人柄を感じさせる。寄り添う夫妻の笑顔には「希望」という名の未来が満ちていた。

復興へ頑張ろう「エイサー」響く

「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト」の取り組み

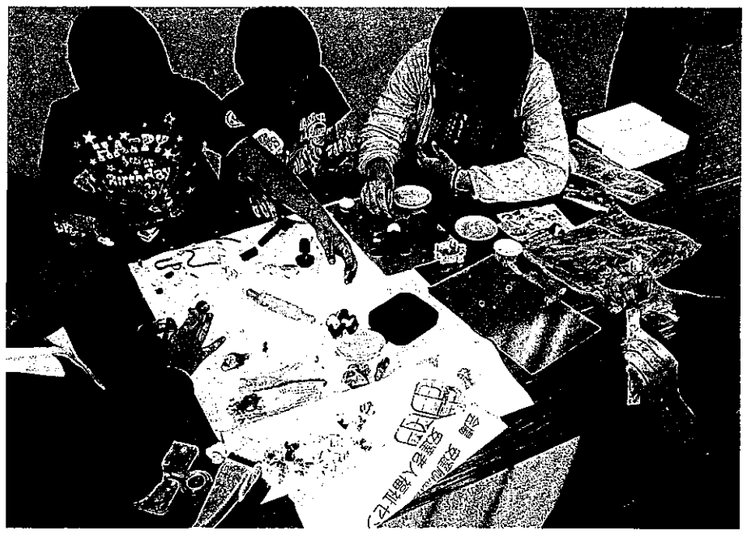
子どもへの支援通じて コミュニティー再生を

県北地区のある大きな仮設住宅団地の集会所から、子どもたちの元気な声が聞こえてきた。

「わたし、縄跳びではやぶさできるよ！」

「お兄さんイケメンだね！サッカー得意？」

子どもたちが話し掛けている相手は、ボランティアの大学生たち。週末にやってくる〝大きな遊び相手〟は引っ張りだこだ。外遊びだけでなく、三十畳ほどのカーペット敷きの広間では、ボードゲーム、粘土遊び、卓球などさまざまな遊びが繰り広げられる。ちょっとこの限られた時間を精一杯味わおうとしているように見える。



◀大学生と一緒に色粘土で〝お菓子〟づくり

仮設住宅の子どもたちに「あそび」と「学び」の場を提供するこの取り組みは、子ども・若者の支援活動をしている県内のNPOと、地元の大学、学生ボランティアが連携して九月から始まった。活動の名称は「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト」。

プロジェクトを統括するNPO法人ビーンズふくしまの事務局長・中鉢博之さん(37)は「子どもたちが地域の中で集い、子ども同士が楽しく遊んだり、関わりの場を持てるようにすることからスタートしました。子どもたち自身がやりたいことをクラブ活動や文化活動のような形で実現したり、親や地域の住民の方々も参加してのイベントの開催なども考えています。子どもや育成会などの再生支援や、子どもを軸にした地域のコミュニティづくり支援に発展させていきたいです」と展望を語る。

すでに、ある仮設団地では、この場がお母さん同士の交流の場にもなりはじめているという。また、このプロジェクトは、大学だけでなく、さまざまな地域の力を借りながら、県内の他の地域にも広げていく予定だ。

子供は「我慢している」

ボランティアとして参加した福島大学の学生の一人は「やんちゃな子もいて、最初はどう接していいかわからなかったけど、普段それだけ我慢しているのだと気が付いた。のびのびと子どもらしく遊べる場を用意してあげることが必要なんだと実感した」と三時間の活動を振り返った。

子どもは昔から「地域の宝物」と言われてきた。仮設住宅での生活は地域のつながりが薄れがちだ。だからこそこの『宝物』に目を向け、みんなで大事にすることが、地域のつながりと未来への希望を取り戻す近道となるのではないだろうか。

▶「お兄ちゃん、僕のボール奪えるかな?」

福島版「仮設de仮設カフェ」各地で開催

「交流、情報交換の場」提供

仮設住宅に「交流、情報交換の場」を提供しようと「仮設de仮設カフェ」が県内各地の仮設住宅で開かれている。九月二十五日(日)、十月十五日(土)には郡山市富田町の旧農業試験場にある仮設住宅集会所前で開催された。ここでは主に富岡町の住民が避難生活を送っている。県中地域絆づくり支援センターの主催。

二〇〇五年の中越地震の際、新潟大学の岩佐明彦准教授と同大学の学生らが各仮設住宅を訪問調査し記録する活動を行い「仮設のトリセツ」としてまとめた。この活動の中で行われたのが「仮設de仮設カフェ」というイベント。県中地域絆づくり支援センターでは、岩佐准教授らの協力を得て福島版の「仮設de仮設カフェ」を行うことになった。

九月二十五日の会場では、集会所前に喫茶スペースと情報を集めたブースを設置。住民らがお茶

▲9月25日に開かれた仮設de仮設カフェ

二本松でも人気 なみえ焼きそば!

菅野　典男さん(53)　浪江町請戸
現住所　福島市笹木野の借上げ住宅

二本松のちょうちん祭りに「なみえ焼きそば」の露店を出店。1日で3回も並んだ人もいるとか…そのコツはとの問いに「お客さんを楽しませること」。

人と人との出会いを大切に…

大井　守さん(76)
南相馬市小高区
現住所
南相馬市鹿島区の仮設住宅

「人と人との出会いを大切に 心と心のふれあいに感動を…の言葉を今、深く感じています。集会場にきてくれた遠くの人たちと一緒に歌った『ふるさと』はとても素晴らしい思い出となりました。」

仲良くすごせる憩いの場所

川崎　要さん(67)
南相馬市原町区
現住所
南相馬市鹿島区の仮設住宅

集会場の運営やコミュニティーの促進を仮設の皆さんと一緒に頑張っている。「誰でも気軽に利用でき、地域に関係なく仲良くすごせる憩いの場所です。」

復興を願い色紙に絵を書いています

根本　清己さん(55)　浪江町大字大堀
現住所　二本松市の雇用促進住宅

「二本松に避難して半年以上たち、仕事のめども立たない状況ですが、復興を願いながら、知人などに色紙を書いています。」

故郷に戻り家業を再開したい

志賀　康弘さん(71)
浪江町幾世橋
現住所
二本松市長命の借上げ住宅

「借上げ住宅に妻と一緒に避難しています。周りに知人も友人も居ない中、7ヶ月ぶりに同郷の友人に会うことができ、なつかしく話し込みました。早く浪江に帰って家業を再開したいです。」

「お兄さんイケメンだね！
サッカー得意？」

卓球などさまざまな遊びが
繰り広げられる。ちょっと

まった。活動の名称は「う
つくしまふくしま子ども未

▶「お兄ちゃん、僕のボール奪えるかな？」

となるのでは
ないだろうか。

復興願う「エイサー」響く

いわき　福島ー沖縄“踊り”が紡いだ絆

▶いわき復興を願い披露された沖縄のエイサー

いわき市の「じゃんがら踊り」が起源とされる沖縄の伝統芸能「エイサー」。九月十八日(日)に行われた東日本大震災犠牲者の慰霊、復興支援のイベント「復興エイサー in いわき」で、両者は共演を果たし、市内各所で多彩なパフォーマンスを繰り広げ大勢の市民に感動を与えた。

同市内の有志らでつくる実行委員会（新城憲一委員長）が主催、沖縄市の久保田青年会、東京都の中野チャンプルーフェスタ、地元のじゃんがら踊り隊らが参加した。津波で大きな被害を受けた平薄磯地区で慰霊の踊りを奉納したのを皮切りに、市内各所を一日がかりで回った。JR湯本駅前の商店街では、エイサーを踊りながら練り歩く「道じゅねー」が披露され、市民らの大歓迎を受けた。

エイサーは沖縄でお盆の時期に踊られる伝統芸能で、十七世紀の初頭、いわき出身の浄土宗の高僧・袋中上人が故郷の念仏踊りを伝えたのが起源といわれる。今回のイベントは“故郷”を襲った未曾有の大災害を見舞い、元気づけるため約四百年の時を経て“里帰り”し、新たな“絆”の大きな輪を広げた形だ。

新城委員長は「地元に沖縄文化を紹介する活動の中で、沖縄はもとより東京のエイサー団体と知り合う事ができました。その縁が結実したのが今回のイベント。『いわきに縁のあるエイサーを見てもらい、みんなに元気になってもらいたい』という各団体の方々の思いが、いわきと沖縄の絆を深めてくれました」と話した。

▶イベントに参加した皆さん

久保田青年会から福島へ応援メッセージ！

●チバリヨー!!沖縄から応援しています。心一つに、復興に向けてがんばりましょう。
●みんなで力を合わせて、みんなで笑顔!!
●同じ空の下、一人のイタミは皆のイタミ、一歩、イッポ、前に。
●みなさんの笑顔をまた見にきます。元気を届けにまたきます。
●温かい心。絶対に忘れません。ありがとう福島、いわき。また必ず来ます。

二〇〇五年の中越地震の際、新潟大学の岩佐明彦准教授と同大学の学生らが各仮設住宅を訪問調査し記録する活動を行い「仮設のトリセツ」としてまとめた。この活動の中で行われたのが「仮設de仮設カフェ」というイベント。県中地域絆づくり支援センターでは、岩佐准教授らの協力を得て福島版の「仮設de仮設カフェ」を行うことになった。

九月二十五日の会場では、集会所前に喫茶スペースと情報を集めたブースを設置。住民らがお茶を飲みながら情報交換をし合うなど盛況だった。今回は、仮設住宅の入居者の磯野玲子さん、遠藤久仁子さんがボランティアとしてイベントに参加した。

磯野さんは「仮設住宅の住宅支援班をしているので、皆さんにもっと顔を覚えてもらいたくて参加しました」。遠藤さんは「ビッグパレットに避難していたときに、ボランティアで喫茶店を運営していて、その大変さを知っていたので参加しました」と話した。二人とも、このイベントを通して「サークルや婦人会の結成などに結びついてくれたら」と期待していた。

十月十五日には、小雨混じりの生憎の天候ながらも多くの方が訪れ、参加者は「こういった場を提供してくれて嬉しい。久しぶりの再会や新たな出会いがあり、色々な人と話せるきっかけにもなるので、定期的に開催してほしい」と口を揃えて話していた。

県中地域絆づくり支援センターでは、今後も「仮設de仮設カフェ」の活動を展開していく予定で、開催を希望する自治体もしくは仮設住宅に住む方々の連絡を待っている。連絡先は、電話024（944）0083、梅津宏之さんまで。

▼10月15日の会場で歓談する住民

みんな一緒の催しとても新鮮

（左から）
坂本　八代江さん（41）楢葉町大字山田
現住所　会津美里町字宮里の仮設住宅
佐土原　由美さん（38）楢葉町大字山田
現住所　会津美里町字宮里の仮設住宅

「流しそうめん、すいか割りなど、仮設住宅に住む以前は各家庭で行っていたことをみんなで一緒に行うことがとても新鮮で、子どもたちも楽しんでいるようです。会津美里町の人達にはなにかと提供してもらい、本当に良くしてもらっています。」

たくさんのイベント計画中

梶原　活司さん（46）
楢葉町大字前原
現住所
会津美里町字宮里の仮設住宅

楢葉町仮設住宅の自治会長。持ち前のリーダーシップでたくさんの人の生活を支えてきた梶原さん。実行委員会を立ち上げ、協賛金を集めるなど工夫をして夏祭りを開催。「まだまだたくさんのイベントを計画中です！」

雨模様でも露店に〝華〟

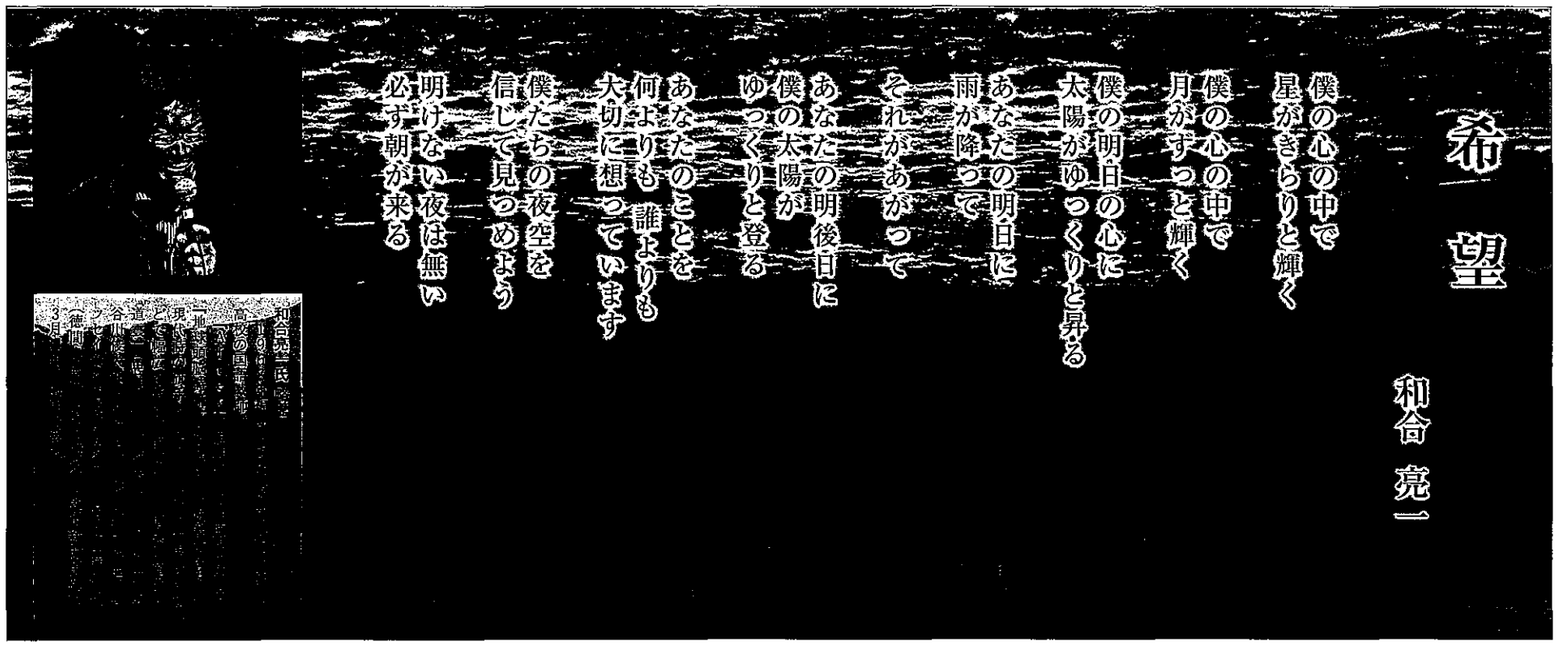
（前列左から）
川島　美幸さん（35）　浪江町川添
現住所　福島市郷野目の借上げ住宅
大友　佳子さん（59）　浪江町幾世橋
現住所　福島市南矢野目の仮設住宅
草刈　はるよさん（58）　浪江町権現堂
現住所　須賀川市向陽町の借上げ住宅
（後列左から）
原田　アキイさん（59）　浪江町権現堂
現住所　会津若松市日新町の借上げ住宅
矢沢　浩子さん（51）　浪江町権現堂
現住所　福島市森合の借上げ住宅

二本松のちょうちん祭りに「大堀相馬焼」の露店を出店。あいにくの雨で「売れ行きはいまひとつ…」でも笑顔の応対で祭りに華を添えていた。

白河のみなさんの応援で元気

猪狩　敬子さん（68）
双葉町大字長塚
現住所
白河市郭内の仮設住宅

「仮設に入って1ヶ月半、初めは不安でしたが白河の方々に応援してもらい、今は元気に明るく管理人をしていますよ。」



絆メールマガジン配信

迅速に情報提供 投稿も募集

絆新聞編集室では携帯電話向けの「絆メールマガジン」を配信します。仮設住宅や借り上げ住宅などで避難生活を送られている方々のために、集会所や公共施設などで行われるイベント、相談会など各種情報を定期的にお知らせします。また、読者の皆様の情報発信ツールとして掲示板のご利用いただくには、掲載されているQRコードからアクセスし、メールアドレスを登録していただくだけです。入会費などの費用は一切かかりません（携帯電話会社とご契約の通信費はかかります）。

メールアドレスは当方が厳重に管理し、絆メールマガジン配信以外の目的で使用することはありません。

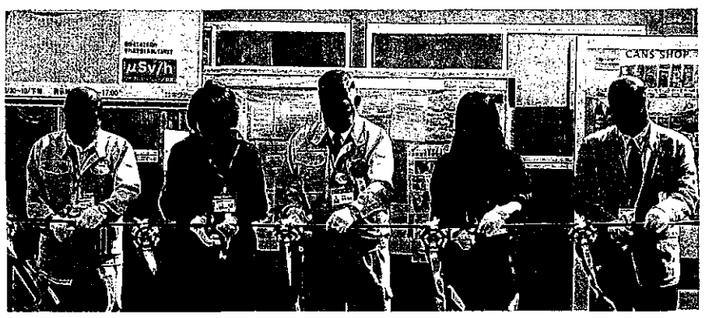
http://www.utsukushima-npo.jp/kizunashinbun/entry.html

ようにお使いいただきたいとも考えておりますので、仮設住宅での催し物、その催し物のスタッフの募集、情報をお知らせするのが困ずれでもかまいません。

本紙が月刊紙である性格上、タイムリーにイベント情報をお知らせするのが困難なため、いわゆる「メルマガ」と呼ばれるシステムを利用し、少しでも早く読者に情報を提供しようという試みです。ご利用いただくことはありません。

「ひろの絆づくり支援センター」発足

避難町民 幅広く支援


▶テープカットする関係者

いわき市の仮設住宅や借り上げ住宅などで避難生活を送る広野町民を支援する「ひろの絆づくり支援センター」が十月三日に発足し、いわき市中央台高久の仮設住宅集会所で開所式を行った。

同センターは県の「がんばろう福島！〝絆〟づくり応援事業」のいわき地域絆づくり支援センター（NPO法人いわきNPOセンター運営）と広野町が協働して開設。広野町民を支援員として雇用し、町民の生活利便・居住環境の向上、生活再建に向けた支援を行うとともに、支援員の育成による町民保健の推進を行う。具体的な取り組みとしては、支援員による避難者世帯への戸別訪問、相談の対応、NPO団体やボランティア団体などと連携協力した各種行事の開催など、幅広い分野でサポートを行っていく。

いわき地域絆づくりセンターのセンター長を務める照井義勝さんは「支援員の皆さんの取り組み意識は高く、活気があります。チーム一丸となって楽しみながら支援企画を議論している様子を見て、今後の活躍を期待しています」と話した。また支援員の猪狩理佳さん（55）は「同じ避難者という目線で物事をとらえ、感じることができるので、たくさんの埋もれたニーズを拾い上げることができると思います」と抱負を語った。

絆づくり支援センター ご案内

仮設住宅でのより良い暮らしを私たちがサポートします！困りごとがございましたら、お電話・お便りください。皆さんの声をお待ちしています！

＜各地域の絆づくり支援センター＞

●県北地域　絆づくり支援センター
TEL　024-573-8425
〒960-8141 福島市渡利字鳥谷下町 67-1

●県中地域　絆づくり支援センター
TEL　024-944-0083
〒963-8835 郡山市小原田 2-19-19

●県南地域　絆づくり支援センター
TEL　0248-23-8909
〒961-0905 白河市本町 2

●会津・南会津地域　絆づくり支援センター
TEL　0242-24-8862
〒965-0009 会津若松市八角町 13-45

●相双地域　絆づくり支援センター
TEL　0244-24-0222
〒975-0034 南相馬市原町区上渋佐字原田 94-4

●いわき地域　絆づくり支援センター
TEL　0246-35-1425
〒970-8026 いわき市平字愛谷町一丁目４番地
10 桂ビル１階

編集後記

一本の矢はたやすく折ることができるけれど、三本束ねた矢は容易には折ることができない…。戦国の世に生まれた逸話は有名です。

現代に生きる私達にとっても一対一の繋がりよりも、もっと沢山の繋がりを持っていたほうが、予想もしなかったような可能性が産まれてくることでしょう。一つの輪より三つの輪、さらに百の輪、千の輪…。増えるほどに明日への希望も強くなると信じます。

本紙は東日本大震災および福島第一原発事故により避難生活を余儀なくされた方々に、一つでも多くの「輪」を結んでいただく契機になればと誕生しました。「絆」の輪が幾重にも連なれば何物よりも強いはずです。

未曾有の大災害を乗り越えるには人語に尽くせぬ苦難を伴うでしょう。微力ながら一つ一つ「輪」を紹介していくことで福島の未来を取り戻していく一助になればと願っています。（義）